

個人研究レベルにおける資史料のデジタル化の可能性

—米田家史料を題材として—

伊藤信哉(神田外語大學非常勤講師)

1 問題の所在

近年のコンピュータ技術の急速な進歩は、自然科学のみならず、人文・社会科学の研究技法にも大きな影響を及ぼしつつある。具体的には、これまでは技術的にきはめて困難であるか、まったく不可能であるとされてきた手法が、個人研究のレベルでさへ、容易に実現可能となりつつある。

今回の報告では、発表者がこれまで數年に亘り、私的に試行錯誤してきた資史料(音聲・寫眞・文獻目録)のデジタル化の技法について、その概要を紹介することにしたい。

- ・ここ2～3年におけるパソコンの処理能力の向上と低価格化
- ・各種ストレージの大容量化と低価格化
- ・これらのデジタル技術の應用の可能性
- ・大學や圖書館などの組織によるデジタル化…その長所と欠點
- ・個人レベルにおけるデジタル化…その長所と欠點

2 音聲史料のデジタル化

(1) 具體的技法

- ・従來の技法:

カセットテープで録音→個人(あるいは所屬組織)で保管

- ・現在可能となりつつある技法

カセットテープまたはMDで録音

→パソコンによつてデジタル・データに變換

→CD-ROMなどに焼き付け

(2) 期待しうる効果

- ・史料劣化の防止: 理論的には半永久的に保存可能

- ・複製の簡便化: 他の研究者による「検証可能性」の道が擴がる

(3) 豫想される問題

- ・技術的限界：メディアの寿命(物理的/製品的)
 圧縮フォーマットの問題

- ・法律的問題：著作権 → 不明な点が多いので、今後検討する必要

- ・研究遂行上の問題：証言者/遺族の心証(特に複製/配布に関して)
 データの改変の可能性

3 写真史料のデジタル化

(1) 具體的技法

- ・従來の技法：
 - ① 保存・分類方法：(一般的な技法は事實上存在せず)
 - ② データベース化：ほとんど実施されず
 また技術的に不可能な側面が大きい
 - ③ 情報の共有：事實上、調査者が独占
 (史料の簡便なコピーは不可能に近かった)

- ・現在可能となりつつある技法
 - ① 保存方法
 現物に対しては、劣化を防ぐための措置を講じる
 スキャナーを使つて、現物からデータを読み取る
 後日の研究に際しては、このスキャンされたデータを使用

 - ② データベース化
 EXCELなどの一般的なソフトウェアを利用して、統一した
 フォーマットでデータベース化
 単なる文字情報のみならず、画像そのものを登録する

 - ③ 情報の共有
 インターネットなどを通じて、デジタル化された写真を交換
 また、大量の写真をCD-ROMに焼き付けることも可能

(2)期待しうる効果

- ・音聲史料と同様に複製が容易になる：検証可能性に道を開く

(4)同右。また米田實「吉野博士のことゝも」(赤松克麿編『故吉野博士を語る』中央公論社、一九三四年に所収)一二二頁。

(5)米田と廣田の関係については、米田家所蔵写真史料(三一一五、四一四三)より推定。

(6)米田直樹・悦子夫妻の筆者(伊藤)への談話(一九九八年一〇月二九日)。悦子氏は、實の四女に当られる方である。

(7)細川辰彦「法学博士米田實氏－新聞売子をしながら苦学－」『キング』第一六卷一三号、一九四〇年、二三六頁。

出典：伊藤信哉・杉山肇「米田實の對米認識」(長谷川雄一編『大正期日本のアメリカ認識』慶應義塾大學出版會、2001年に所収)207頁。

- ・劣化の防止と利用の簡便化

- ・データベース化と情報の共有により「共同作業」の可能性が高まる

(3)豫想される問題

- ・技術的問題：完全な「複製」は不可能(紙質／發色など)
データのサイズをどうするか(解像度の問題)
どこまでデータベース化するか(検索との関係)

- ・法律的問題：著作権(肖像權／データベースの編集著作権など)

- ・研究遂行上の問題：原史料の保有者の心証(特に複製／配布)
作業に要する労力の問題
「盗作」の問題

4 文獻目録のデジタル化

(1) 具體的技法

・従來の技法：

各研究者が獨自に資料を蒐集し、カードなどで整理
(情報の共有は非常に困難／検索も困難になりがち)

・現在可能となりつつある技法

あらかじめ統一したフォーマットを作成し、複数の研究者による共同作業

データの統合と共有による、大規模なデータベースの構築

(2) 期待しうる効果

・分擔による作業効率の向上

・検索の簡便化

(3) 豫想される問題

・技術的問題：文字コード(新字體・舊字體)の問題

・法律的問題：著作権(データベースの編集著作権など)

・研究遂行上の問題：作業に要する労力の問題

「盗作」の問題

5 今後の展望

以上のやうに、史料分析の技法において、さまざまな可能性が開けつつある。しかしこれらの技術を駆使して「何を分析するか」は、結局のところ個別の研究者の意思と判断に據るのであつて、今回紹介した技法は、あくまでもそれを側面から支援するにすぎない。

しかし、そのような限界をわきまへつつ、適切にそれらを利用するならば、研究の効率は一時的に観れば、大きく向上するであらう。